

## 悪魔と神が同時に顕現する我々の時代

この悪の極致は何を意味するのか？

Greatchain

2017/10/27

私のここで述べる世界解釈は、一般には宗教的立場と理解されるであろう。そのような立場を全く受け入れない人には、読んでいただいてもあまり意味がないことを、断っておきたい。

最近の私の翻訳紹介した記事の中で、最も多く「いいね」をいただいたのは、「レディ・ガガ：私は魂をイルミナティ暗黒勢力に売ったことを後悔する」(9/25)であった。この何が人々に訴えたのか分からないが、私としては、悪魔(サタン)が実在し、魂を売ることが単なる比喻でないことを、これによって実証できるかと考えた。そして悪魔は、何らかの意味をもって、あるいは役割をもって存在しているという仮説を立てて、私はすべてを考えている。これはイルミナティの最高の哲学者と私の考える Hidden Hand の立場と一致する。「役割？ 我々をこれだけ苦しめておいて何を言うか！」という当然の怒りは、しばらく保留(“止揚”)していただかなければならない。

(Hidden Hand については：<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170719.pdf> 参照)

この記事を読んで下さったある読者から、「地獄からの脱出」というビデオがあることを教えていただき、それがこれを書く動機の一つになっている。それは John Ramirez, “Escape from Hell” <https://www.youtube.com/watch?v=J8yIQuQ3sAU&t=3s> (日本語訳付き) というもので、簡単に説明すると：——ジョン・ラミレスは生まれたときから、Satanism (悪魔崇拝) の環境にいた。人殺しは日常的であり、黒魔術で人を苦しめたり殺したりすることが普通に行われていた。しかし仲間同士の争いがあり、あるとき、ついにサタンそのものと対決しようと決心して、彼は逃げ場のない“地獄”へ出かける。そして強力なサタンに殺されようとする、その瞬間に十字架が現れて救われ、自分がイエスに愛されていることを知る。彼は、どうして最も救われる価値のない自分が救われたのか分からなかったが、それは現実だった。それ以来、彼は強力なイエスの信仰者となる。

以上は単独で語る内容だが、会衆に語っている場面もある。これが説教だとしたら、これほどの強力に訴える説教はないであろう。サタン世界出身のイエスの証し人に、嘘や偽善はありえず、魅力をもたないはずはない。会衆の表情にもそれは現れている。彼はここで、重要

なことを言っている——自分はキリスト教徒になっただけでなく、イエスに直接仕える者になっただけ、と。これは重い言葉であり、これが本来の宗教のあり方だと考えさせられる。これは、神が自分の存在に気付かせるべく企んだ、最も驚嘆すべき、効果的な方法だと言えるだろう。

このジョン・ラミレスの辿った数奇な運命は、我々のこの時代そのものを、一人の人間に集約したものではないだろうか？ 悪の極致、または墮落の極限というべきものが、この時代に姿を現していることは誰も否定できない。ペドフィリアの蔓延ひとつに限ってもそう言わざるをえず、それは個人を越えた、「徘徊する」悪霊そのものとも考えることもできる。サタンの意図的に選んだ、最も効果的な人間破壊の方法がペドフィリアだった。しかし摂理史的に見れば、それは「演じられた悪」であって、一つ高い境地に我々を跳躍させる、気づきの手段とも考えられる。これを「触媒」と呼ぶ人もいる。触媒を使わなければ、大きな化学変化は望めない。我々はこの恐ろしい現状を命がけで体験して、目を開かない限り、世界を変えることはできず、いつまでも同じ悲劇を繰り返すだろう。

ジョン・ラミレスとは正反対の、立派な家庭（環境）に生まれ、どんなに立派な宗教教育を受けても、それは飛躍の契機にはなりにくいだろう。人間がどこまで墮落し、どこまで悪魔と通ずることができるかを、体験しないまでも見届けない限り、本当に目覚めることはむづかしいだろう。今、我々は集団でかつ命の危険を冒して、そのどん底体験を強要されており（自然環境の危機も含めて）、集団でそこを通過し、集団で覚醒しない限り、行くべき次の世界は見えてこない。

ラミレスの体験から親鸞を思い出す人があるかもしれない。親鸞は、ラミレスとは正反対の環境で、立派な宗教教育を受けた、自他ともに認める人のことを「善人」と呼んだ。そして「善人」は、どん底に落ちた「悪人」よりも却って救われるチャンスは少ないと言った。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」——その意味が、我々のこの時代に、何百年の年月を経て生き返ったのではないだろうか？ 親鸞にも、**Hidden Hand**と同じように「役割を演ずる」という考え方がある。我々は自分が立派なので、悪いことをしないのではない、悪いことができない宿業の下に生まれたにすぎない。それと同じように、悪いことしかできない宿業を背負って生まれてきた人たちもいる、と親鸞は言う。——これはまさに、イルミナティの家庭に生まれ、サイコパス教育を施され、**NWO** 実現の誓約を課せられた、不幸な人々がそうである（これについては、離脱者スヴァーリの告白を参照されたい）。

そのように考えるならば、我々は、悪をなす者たちをひたすら憎むという、考え方から解放されるだろう。憎しみに凝り固まるということが、どれだけ自分に害を与え、不幸にするかもしれない。それはこの世だけで終わらず、来世まで持ち越されて、もう一度生まれ変わって

も、また同じことを繰り返さねばならない——それがカルマである。そう考えることによって、「許す」ということが可能になるだろう。許すことがどれだけ難しいかは、捕まったペド犯への、いくつか報告されている復讐のすさまじさから想像できる。もちろん刑法の処罰は当然だが、それとは別に、心の中で許すことができなければ、この世界を変えることはできない。そのためにこそ「悪役を課せられた人々」という考え方の転換が必要になる。

ここには一つの無言の前提がある——我々は歴史を通じて、また生まれ変わりを通じて、創造者に近づいていく（本来の自己に目覚めていく）という前提である。我々が長いこと、真理であるかのように強制されてきた、ダーウィン進化論は、そういう考え方を妨げていた。しかしそれは、学界や思想界を強力に支配してきたイルミナティによって、押し付けられたものと考えべきふしはいくらでもある。彼ら自身はそんなものを信じていない。それは我々を、低い知的レベルに保ち、思考の発達のを引張る道具にすぎなかった。唯物論も無神論も“閉ざす”思想であって、人間を閉じ込めておく牢獄にすぎない。

一つにはそれは、思想的に、彼らには不可欠で好都合な、主張を含んでいた——強者が弱者を滅ぼすことを正当化する「優生学」、つまり 5 億への人口削減計画である。更には、人間蔑視思想であり、ダーウィン進化論の一つの帰結は、「人間は宇宙のゴミにすぎない」という思想である。この 2 つの考え方だけでも、どれだけ彼らにとって好都合であるかがわかるだろう。しかし、この歪んだ宇宙解釈を、やっと人々は相手にしなくなった。我々は、科学だろうと道徳だろうと、（サタンのように対立するのではなく）創造者に寄り添って考えてみることなしに、正しい結論を導き出すことはできない。

——以上